別記様式第６

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博　士（　文　学　）	氏 名	松沢　絵里
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目

The Language of *Kyng Alisaunder* and Do
（『キング・アリサンダー』の言語と Do）

論文審査担当者

主　　査		教 授	地 村 彰 之
審 査 委 員		教 授	今 林　　修
審 査 委 員		教 授	吉 中 孝 志
審 査 委 員	教育学研究科	教 授	中 尾 佳 行
審 査 委 員	慶應義塾大学	名誉教授	池 上　　昌

〔論文審査の要旨〕

本論文は，14 世紀初期のロンドンの英語で書かれたとされる脚韻詩『キング・アリサンダー』（KA）において，動詞 DO が助動詞としての機能を確立する以前の状態を実証的に研究したものである。

第１章から第４章までは，本研究の背景的な説明をしている。

第１章は序章，第２章では，KA の現存する写本および初期印刷本の中で，ロンドン英語で書かれているオックスフォード大学ボドリアン図書館蔵の B テキストについて解説している。

第３章では，14 世紀ロンドンの社会的及び言語的状況を説明する。人口の移動の激しいロンドンにおいて KA の言語も古い形態のものから，現代標準語の先取りとも考えられる新しいものまで，様々な音，形態，語彙が存在していることを指摘している。

第４章では，KA に見られる 14 世紀初期のロンドン英語の多様性を，実例を挙げ説明する。

第５章から第９章までが，KA における DO の用法についての詳細な研究である。第５章では，DO の KA における用法を分類している。281 の DO の用例中，不定詞を伴わないものが 204 あり，これを MAIN VERB 用法としている。不定詞を伴うものを VERB V 用法とし DO の場合は DO　V である。DO は目的語，つまり V の主語を伴うものを DO O V 用法としている。さらに，DO V と統語的に同じである GIN V 用法と比較している。韻律的には，GIN はその不定詞を脚韻の位置に置く頻度が全体で 88.2%と DO の 50.6%よりかなり高く，GIN を使う一つの目的と考えられる。

第６章では，DO V 構造に潜む曖昧性について指摘する。DO の用法が使役なのか，迂言的なのかはっきりしない Ellegård の言う *equivocal do* の存在である。しかし，“DO CRY” では叫び声の効果を高めるように DO が工夫されているため，DO に強調的な意味合いがあると述べる。また，DO は BE, CAN, DO, HAVE を不定詞にとる用例が存在していることを指摘する。

第７章では，強調的意味合いが感じられる DO が，韻律的に強位置にあるかどうかを検証している。屈折語尾の消失が完全でないため，屈折語尾のない行のみでの調査である。KA の DO には，疑問文，否定文における用法はなく，ほとんどが使役用法である。迂言的用法とみられるものが 3 例あり，強調の意味が込められている可能性を指摘する。

第８章では，他の使役動詞と比較しながら使役用法の DO を検証している。KA では現代英語に見られる MAKE と HAVE は使役動詞として使われていない。HAVE の初出は 1390 年ごろであり，これは KA の事実と合致する。MAKE の初出は 1225 年であるが，KA には見当たらない。DO が不定詞をとる場合，

意味が曖昧になる DO V 構造が圧倒的に多い。不定詞を伴う例 77 例のうち 60 例が DO V 構造であり，使役の例（DO O V 構造）は 17 例である。他の使役動詞は不定詞の主語が明確である VERB O V 構造がほとんどであり，曖昧な意味はないと説明する。

第 9 章では KA で使われている DO を英語史の中で位置づける。(1) 迂言，(2) 肯定文における倒置を伴う迂言，(3) 疑問文での用法，(4) 強調用法，(5) 否定疑問文における用法，(6) 否定叙述文における用法である。このうち，14 世紀初期に見受けられる使役，(1) 迂言，(2) 肯定文における倒置を伴う迂言の用法は KA にも例が表れている。(3) - (6) の初出は 1390 年から 1417 年であり KA より後で起こる。

第 10 章では，VERB V において VERB が脚韻の位置にくる割合，V が脚韻の位置にくる割合を比較した後，KA における，使役用法の DO とその役割の変化の関係を考察し，本論を締めくくっている。DO が不定詞を伴う場合，意味が多重になり混在している。15 世紀初頭から，HAVE が使役として使われ始め，使役の DO の役割を HAVE に譲り DO O V 構造は消え DO V が残る。また迂言の DO も方言には残るが，標準英語では消えていく。そこから，DO の強調の意味が見え始め，DO V は他の助動詞と同じ構造であったため，助動詞が担っていた OPERATOR としての役割を担うことができたと説明する。音韻論の整理と 15 世紀以後の DO については今後の課題として残されたが，本論文は中期英語期の DO の用法を実証的に検証したものとして，高く評価することができる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500 字以内とする。